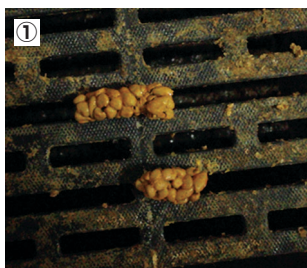


下痢便の性状から原因を推定する

(有)サミットベテリナリーサービス 石川 弘道

農場で下痢の諸症状が出たときの対応として、獣医師に連絡のうえ病性鑑定等の検査を行い、その原因を特定することが重要である。しかし、下痢を引き起こす疾病は検査結果が出る前に獣医師の指導のうえで、現場で即対応することがその後の経過を分ける場合も多い。下痢便の特徴や豚の症状から、ある程度原因を推定することは可能である。「健康な便の状態」を頭に入れたうえで、以下の写真にあるような下痢便について、日々の管理のなかで注意し、早期の下痢の発見・対応に役立てていただきたい。（編集部）



健康時の便
①哺乳子豚
②肥育豚
③母豚



早発性大腸菌症

生後3日齢以内に発生する。水様性の下痢便を排せつし死亡率は高い。



大腸菌症：離乳後下痢

大腸菌による下痢は、哺乳子豚および離乳子豚の下痢のなかで最も一般的なものである。哺乳中の下痢には生まれてすぐ発症する早発性下痢と生後10日前後で発症する遅発性下痢に分けられる。下痢は日齢が若いほど激しく、早発性大腸菌症では水様の下痢便を排せつし、体がぬれネズミのようになることもある。



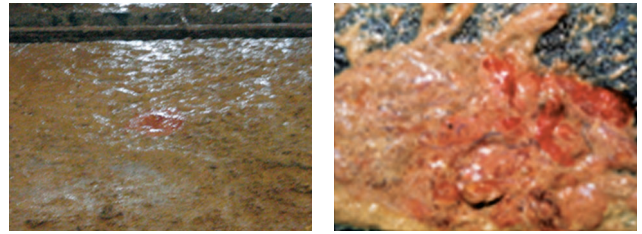
大腸菌による白痢

通常7日齢以降に下痢が認められる。コクシジウムとの混合感染も多く、下痢便だけでは区別がつかない。



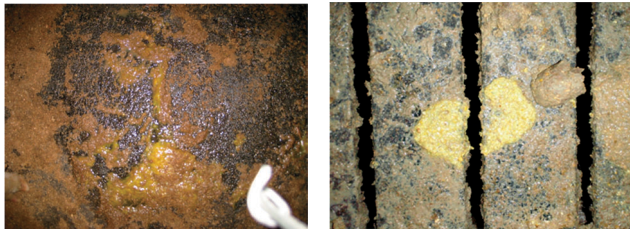
コクシジウム

とくにイソスポーラ・スイスというコクシジウムの仲間が重要である。コクシジウムの卵（オーシスト）を経口的に摂取することにより感染が成立するが、オーシストが子豚の小腸に到達し、症状が出るまでには最低5日はかかる。従って、多くは7日齢以降に下痢が認められるようになる。この点が生後まもなく発生する大腸菌症やクロストリジウム病と異なる点と言える。



豚赤痢

豚赤痢の症状は主に粘血下痢便の排せつである。しかし個体によっては血便の排せつを示さず、軽度の下痢のみのものもある。死亡率は高くないが、食欲は減退し、増体の低下を招く。感染豚はキャリアとなり、少なくとも10～12週間は菌を排せつし続ける。



サルモネラ

急性型の症状は突然発病し、40℃以上の発熱、食欲不振、元気消失などのほか、耳、四肢、下腹部などに紫斑が認められることもある。急性型とは別に、腸炎型と言って、下痢や血便を排せつしてヒネ豚になるものもある。下痢は主に離乳豚に発生し、水様の下痢から始まり、白色から黄色になり、ときには血便を排せつする。



豚鞭虫病

症状は豚赤痢と似ていて、赤色の血便や水様下痢便を排せつする。また腰がふらつく豚が認められることがある。発生は豚群の豚全般に認められ、その後死亡豚も認められるようになる。



TGE

繁殖豚を含むすべての日齢の豚に水様性下痢が認められ、哺乳子豚の死亡率が高い場合は、TGEが疑われる。



豚増殖性腸炎 (PPE)

豚増殖性腸炎は、ローソニア・イントラセルラーリスという菌が原因で起こる豚の下痢症である。ネズミは保菌動物となる。症状は、多量の出血便を排せつし死亡する急性例から軟便を排せつする慢性例まで多様である。